

# PISSA型読解力とはどのような力か。 どのように育んでいくのか

早稲田大学教職大学院 教授 **田中博之**

21世紀社会を生きる上で必要となる主要な資質・能力の1つとしてOECDが提起したPISSA型読解力とは、どのような力なのか。それは日本の学校教育や大学入試に、どのような影響を及ぼしてきたのだろうか。PISSA型読解力の定義からその資質・能力を育む指導までを、学力調査のあり方について研究を続けてきた専門家に聞いた。

## PISSA型読解力は日本の教育改革の軸

### 学習指導要領の改訂を 方向づけたPISSA型読解力

PISSAは、OECDが進める国際的な学習到達度調査で、15歳児を対象に読解リテラシー、数学的リテラシー、科学的リテラシーの3分野について調査します。読解リテラシー（原文は「Reading Literacy）」、いわゆるPISSA型読解力は2003年、OECDが規定した能力概念「キー・コンピテ

ンシー」の枠組みの中で、21世紀社会を生きる上で必要となる主要な資質・能力の1つとして提起されました。以来、PISSA型読解力は日本の教育政策に影響を及ぼし続けています。

文部科学省は、PISSA型読解力を、「自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する能力」であると、その結果分析の中で記しています

**たなか・ひろゆき** 大阪教育大学助教授、教授などを経て、2009年度より現職。1996年及び2005年、文部科学省長期在外研究員制度により、ロンドン大学キングズカレッジ教育研究センター客員研究員を、2007年度から18年度まで、文部科学省の全国的な学力調査に関する専門家会議委員を務める。著書・編著書に、『教師のためのChatGPT活用術』（学陽書房）、『高等学校 探究授業の創り方』（学事出版）、『主体的・対話的で深い学び』学習評価の手引き』（教育開発研究所）など。

※プロフィールは、2024年3月時点のものです。

情報の取り出しにとどまらず、幅広い力を見る

情報の取り出しから解釈、  
熟考・評価までを含む

PISA型読解力とはどのような力なのか、具体的に見ていきましょう(図1)。

PISA型読解力は「自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する能力」であることは既に述べました。その具体的な能力領域として

(\*1)。従来の日本の学校教育で育成してきた読解力は、教科書の素材文を正確かつ詳細に読む力でしたが、PISA型読解力は、実社会に存在する多様な資料やデータを比較・分析し、それによって分かったことを自分なりに解釈・評価し、他者に分かりやすく伝えるという、総合的な学力を示しています。

2004年に発表されたPISA 2003(第2回調査)の結果で、日本は読解力が14位に(第1回8位)、

数学的リテラシーが6位に(第1回1位)に下がりました。いわゆる「PISAショック」を受けて、児童・生徒が課題を設定し、様々な資料やデータを活用しながら問題を解決していくような学びを重視すべく、学習指導要領が改訂されてきました。大学入学共通テスト(以下、共通テスト)が複数の多様な資料や日常生活に関連した題材から必要な情報を読み取ることを求める出題となっていることも、PISA型読解力を踏まえてのことです。

設定されているのが、「情報の取り出し」「解釈」「熟考・評価」の3つの項目です。

また、従来の日本の学校教育で育成を目指してきた読解力と比較すると、PISA型読解力の特徴として、「テキストに書かれた情報の取り出しだけでなく、解釈、熟考、評価も含む」「ただ読むだけでなく、テキストを利用して見たり、テキストに基づいて自分の意見を論じたりする」「テキストの内容だけでなく、構造・形式や表現法も

図1

**PISA型読解力とはどのような力か**

**PISA型読解力を構成する能力領域**

- 情報の取り出し
- 解釈
- 熟考・評価

**文部科学省の解釈によるPISA型読解力の特徴(従来の読解力との比較)**

- ①テキストに書かれた「情報の取り出し」だけでなく、解釈、熟考、評価も含む
- ②テキストを読むだけでなく、テキストを利用したり、テキストに基づいて自分の意見を論じたりするなどの「活用」も含む
- ③テキストの内容だけではなく、構造・形式や表現法も、評価すべき対象となる
- ④テキストには、文学的文章や説明的文章などの「連続型テキスト」だけではなく、図やグラフ、表などの「非連続型テキスト」も含む

※田中教授の提供資料と取材を基に編集部で作成。

評価する」「テキストは文章だけではなく、図やグラフ、表などの非連続型テキストも対象とする」といったことが挙げられます。

PISA型読解力を測る  
問題の特徴とは？

次に、PISA型読解力が、どのような問題によって測られるのか、見ていきます(P.6図2)。

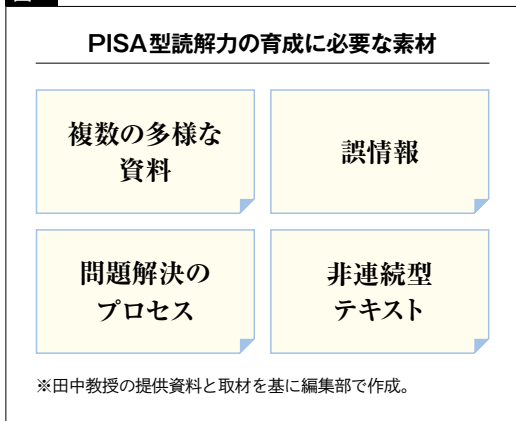
PISAでは、複数の多様な資料を比較・分析して、各資料の要旨を捉え、自分なりのメッセージをつくることのできるかどうか問われます。情報化が進展する21世紀を生きる子どもたちには、文学などを通して人の機微に触れ、感受性を養うとともに、多様で大

量の情報を処理し、それらの要旨を捉え、自分なりのメッセージをつくる力が求められています。そうしたことを踏まえて、PISA、そして共通テストでも、多様な複数の資料を活用する問題が出されているのです。

情報社会では、正確な情報や有用な情報だけでなく、誤情報や意図的につくられた偽情報もあふれています。そのため、複数の情報を比較して、より適切な情報を見抜くことを求める問題もPISAでは出されています。文部科学省が全国の小・中学校の最高学年の全児童・生徒を対象に実施している全国学力・学習状況調査でも、誤情報を探し出して記述させる問題を出しています。その意図はPISAと同じです。

\* 1 文部科学省「平成16年度 臨時全国都道府県・指定都市教育委員会 指導主事会議 PISA調査における読解力の定義、特徴等」

図2



またPISAでは、実験や仮説の検証などの過程を再現したテキストの読み取りも求められます。日常生活や学校での学習場面などでの問題解決のプロセスを出題して、複数の教科に関連する知識・技能を活用した読み取りを求めているのです。

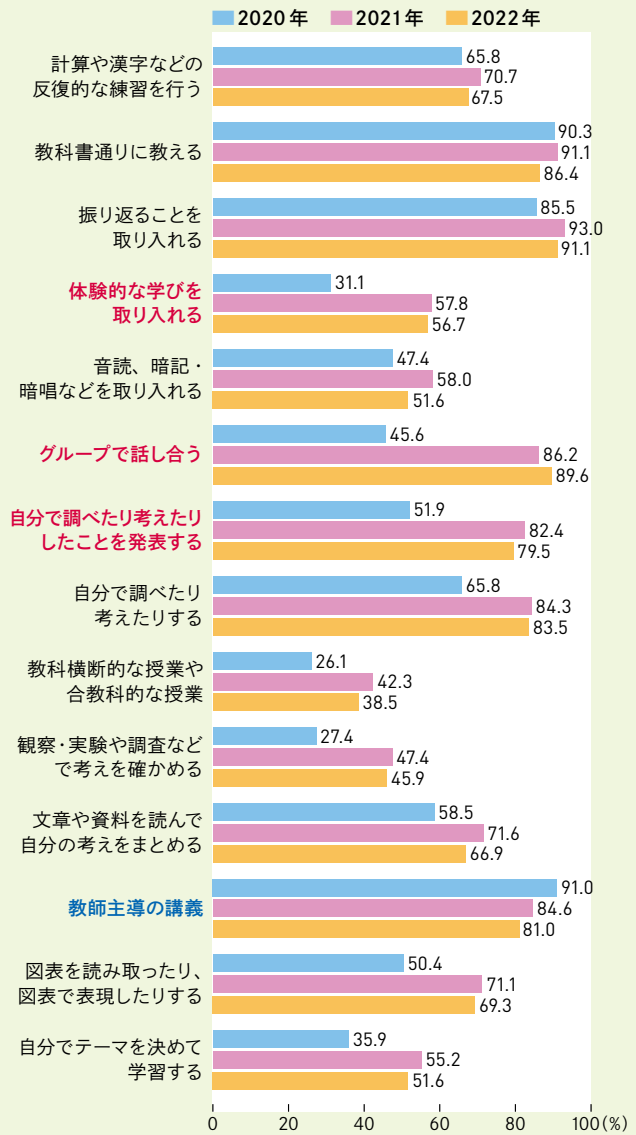
PISAの問題文が長いのは、実験などのリアルな場面を再現するために説明が必要だからであり、長文を読ませること自体が評価目的ではありません。そのことは、共通テストの問題にも言えます。つまり、PISA型読解力が求められるような問題を解けるようになるためには、長い文章をただ読めるようになるだけでは不十分であ

り、問題解決のプロセスなどを実際に経験することが必要です。

PISAでは、図やグラフなど、非連続型テキストが盛り込まれた文章が問題の中に登場します。それも共通テストとの共通点です。既に小・中学校では、国語の教科書にも図やグラフ、地図などの非連続型テキストがふんだんに盛り込まれていますし、小学校高学年からは、図やグラフを用いたレポート作成にも取り組むなど、授業改善が進んでいます(Data)。

**Data 中学校の教科の授業方法（経年比較）**

中学校では、2020年からの2年間で「教師主導の講義」が減少した（91.0% ⇒ 81.0%）のに対して、「体験的な学びを取り入れる」「グループで話し合う」「自分で調べたり考えたりしたことを発表する」は20%以上増加。



※「よく行っている」+「時々行っている」の%。  
※ベネッセ教育総合研究所「小中高校の学習指導に関する調査2020-2022」

**読解力を育む指導のキーワード**

**探究学習を通じて読解力を育む**

PISA型読解力を育成するためには、学校にはどのような指導が求められるのでしょうか。ここでは、「探究学習」「反駁・反証」「アウトプット」という3つの活動をキーワードに考え

ていきます。

**探究学習**

問題解決のプロセスを読む際には、主体的に課題に取り組む、その中で問題を分析したり、他者に自分の考えを伝えたりした経験があった方が、問題文の状況を理解しやすいでしょう。定理・公式や法則をただ



読解力とは何か？

覚えることだけが、教育の本義ではありません。身につけた知識・技能を実際に問題解決に役立て、生きて働くものとして習得することこそ重要であり、そうした力を評価するPISAや共通テストでは、実際に問題解決に取り組んだ経験がある生徒が取り組みやすい問題を出しています。

問題解決を経験する場として最適なのは「総合的な探究の時間」ですが、それだけでは十分とは言えません。各教科の授業においても、それぞれの特質に応じた見方・考え方を働かせながら、生徒自身が課題を設定し、複数の多様な資料を読み解き、自分の考えを表現していくような探究のプロセスを取り入れていくとよいでしょう。

反駁・反証

SNSが身近なコミュニケーションツールとなる中、フェイクニュースにだまされたり、フィッシング詐欺の被害に遭ったりする人は、年齢を問わず少なくありません。誤情報も多く紛れている情報の海の中から正確なものを見抜く力は、まさにこれからの社会を生き抜くために必要な読解力として、すべての人に不可欠です。そうした力を養うためには、授業の中で反駁（他者の意見に対して論じ返すこと）や反証（相手の主張が間違っていることを証

拠によって示すこと）の経験を積むことが重要です。実際、欧米の高校では、レポートを読んで、その中にある誤情報を見つめるだけでなく、それが誤情報と言える理由は何かを生徒同士の議論を通じて明らかにしていくような授業、つまり、正しいことを証明するのではなく、誤りであることを証明するような授業が行われています。

他者と建設的に批判し合うことを恐れているのは、国際社会で多様な価値観を持つ人々と協働し、新しい価値を創出することはできません。ぜひ日々の授業の中でも、反駁や反証に取り組み機会をつくっていただきたいと思えます。生徒同士での反駁、反証が難しいようであれば、最初は教師がわざと誤情報を入れた文章や図を作成し、それらを批判させてもよいでしょう。生成AIを活用すれば、出典元が確かなデータの中にわざと誤情報を盛り込んだテキストを作成することも容易なはず

論理的に書くことを通じて、読解力が高まっていく

アウトプット

PISA型読解力は、書く力と連動しています。私が接している学

生たちを見ても、テキストをしつかり読むことができる学生は、構成が論理的で、誤字・脱字や文法上の間違いが少ないレポートを書くことができます。そして、読む力と書く力のある学生は、ゼミなどでの議論も巧みに行えます。

読解力を高めるには、様々なテキストを読むだけでなく、読んで分かったことや考えたことをまとめたり、そのまとめを他者に伝えることを意識して構成し直し、表現したりするアウトプット活動が欠かせないと私は考えています。高校の授業でも、生徒が作文やレポートなどを書くアウトプットの場

面はたくさんあると思います。そうした教育活動の中で、生徒の主張とその根拠は明確か、正しく、説得力のあるものかなどを見取ることで、書く力とともに読解力が伸びていくでしょう。

PISA型読解力は、アウトプットにつなげてこそ、育成・評価することができますものだと私は考えています。そしてそれは、分かったこと、考えたことをアウトプットして初めて、他者に貢献ができる資質・能力となります。先生方には、ぜひ生徒のアウトプットの機会を充実させていただきたいと思います。



# PISA2022の結果分析

2023年12月にPISA2022の結果が発表された。  
世界81の国・地域の15歳児が受検した同調査で、日本は好成績を収めた。  
その要因をここでは解説する。

## 前回調査から 読解力の順位が大きく上昇

PISAでは、読解リテラシー、数学的リテラシー、科学的リテラシーの3分野について、コンピューターを使ったテスト形式で、15歳児の学力を測っています。23年に発表されたPISA2022（調査は22年に実施）の結果において、日本は、調査に参加した国・地域中、読解リテラシーが3位（OECD加盟国中

2位）、数学的リテラシーが5位（同1位）、科学的リテラシーが2位（同1位）と、いずれも世界トップレベルを維持しました。特に、前回（調査は18年に実施、15位（同11位）だった読解リテラシーが、今回の調査では大きく上昇しました。

なぜ、日本は今回、好成績を収めることができたのでしょうか。しかも、多くの国が前回から平均得点を下げた中で、日本は平均得点を上げました（図1）。その要因の1つとして考えられるのが、

新型コロナウイルスの感染拡大のために休校した期間が、日本は他国に比べて短かったことです。コロナ禍の中で日本の先生方が子どもたちの学びを止めないよう努力されたことが、今回の結果に結びついたといつことです。また、学校現場で主体的・対話的で深い学

びの実現など、学習指導要領を踏まえた授業改善が進んだことや、学校にICT環境が整備され、生徒が端末の使用に慣れたことなども、好成績を収めた要因として考えられます。PISAは、15年の調査からCBT（\*2）形式で実施されて

いますが、ICT環境が学校現場で十分に整っていないかった日本は、コンピューターの操作に不慣れな生徒が、持っている力を発揮し切れなかったのではないかと考えられます。今回はGIGAスクール構想が実現したことで、日本の子どもたちが本来の力を発揮できたものと考えられています。

## ICTを活用した 探究学習の充実が重要

全国の高校の先生方とお話すると、「総合的な探究の時間」や各教科の授業を通じて、PISA型読解力を育むような取り組みが増えていると実感します。例えば、1つの出来事を多角的な観点か

図1（\*1）

### PISAにおける読解力の順位と平均得点

順位	国 ※（ ）は前回の順位	平均得点 ※（ ）は前回の平均得点
1	アイルランド(4)★	516(518)
2	日本(11)	516(504)
3	韓国(5)	515(514)
4	エストニア(1)	511(523)
5	カナダ(2)★	507(520)
6	アメリカ(9)★	504(505)
7	ニュージーランド(8)★	501(506)
8	オーストラリア(12)★	498(503)
9	イギリス(10)★	494(504)
10	フィンランド(3)	490(520)
OECD加盟国平均		476(487)

※国名の後に「★」が付されている国・地域は、PISAサンプリング基準を1つ以上満たしていないことを示す。



【解説者】  
ベネッセ教育総合研究所  
教育イノベーションセンター長  
小村俊平 こむら・しゅんぺい

2015年にスタートした、近未来において子どもたちに求められるコンピテンシーと、その育成につながるカリキュラムや教授法、学習評価などを検討する「OECD Education 2030プロジェクト」に参画。これからの児童・生徒が身につけるべき資質・能力の定義に貢献した。PISAの創始者であり、教育政策の世界的権威であるアンドレアス・シュライヒャーOECD教育・スキル局長兼事務総長教育政策特別顧問の著書『教育のワールドクラス—21世紀の学校システムをつくる』（明石書店）の企画・製作・翻訳にかかわった。

\* 1 図1～3は、文部科学省・国立教育政策研究所「OECD生徒の学習到達度調査 PISA2022のポイント」を基に編集部で作成。  
\* 2 Computer Based Testingの略。コンピューター上で実施する試験。

## これからの社会を生きる上で必要な読解力を、 学校現場はどのように捉え、育んでいるのだろうか？

ここまで、PISA型読解力とはどのような力で、それをどのように育んでいくのを見てきた。PISA型読解力は、学習指導要領のあり方にも大きな影響を与え

ており、大学入学共通テストで複数の多様な資料が教科を問わず問題文中に提示されているのも、PISA型読解力の育成を重要な目的の1つとしてきた初等中等教育

を踏まえてのものだ。  
生徒に必要な資質・能力の1つとして読解力を挙げる教師は少なくない。では、そうした教師が育成を目指す読解力は、どのような力なのだろうか。そしてそれをどのようにして育んでいるのだろうか。学校現場の実践から、読解力を捉えていく。

図2(\*1)

ICT活用調査		
「学校でのICTリソースの利用しやすさ」指標		
5位	日本	0.31
OECD加盟国平均		0.00
「ICTを用いた探究型の教育の頻度」指標		
29位	日本	-0.82
OECD加盟国平均		0.01

※ICT活用調査に参加したOECD加盟国29か国の平均値が0.0、標準偏差が1.0となるよう標準化されており、その値が大きいほど、学校でのICTリソースが利用しやすいことや、ICTを用いた探究型の教育の頻度が高いことを意味している。

ら比較分析したり、学校外の立場が異なる人々と社会課題について対話したりするなど、内容を深く理解・熟考するようなものです。  
ただ、課題もあります。PISAではICTの活用に関する調査も行っていますが、日本は「ICTリソースの利用しやすさ」がOECD加盟国の中でも上位であるにもかかわらず、「ICTを用い

図3(\*1)

生徒質問調査				
「生徒の学校への所属感」指標				
順位	国	2022年	2018年	
1	オーストリア	0.44	0.40	
2	スイス	0.36	0.30	
3	スペイン	0.27	0.46	
4	ドイツ	0.27	0.28	
5	韓国	0.26	0.28	
6	日本	0.25	0.02	
7	ノルウェー	0.23	0.36	
8	アイスランド	0.16	0.10	
9	ハンガリー	0.14	0.07	
10	デンマーク	0.11	0.21	
OECD加盟国平均		-0.02	0.00	

※OECD加盟国37か国の平均値が0.0、標準偏差が1.0となるよう標準化されており、その値が大きいほど、学校への所属感が高いことを意味している。

た探究型の教育の頻度」は最下位という結果になりました(図2)。  
ICTは、データを比較・分析したり、多様な他者とながったり、考えたことをまとめて発表したりする際に、とても役立つツールです。ICTを活用する授業を教師が考え、実践することで、生徒が読解力の必要性を身をもって実感したり、身につけた読解力を発揮して学びを

深めたりする場面を増やしていくことができると思います。

### ウェルビーイングな学校で 読解力を育む

今回の調査の中で特に私が先生方と共有したいと思ったのが、教育におけるウェルビーイングに関する調査結果です。

同調査では、「学校の1員だと感じている」「他の生徒たちは私をよく思ってくれている」「学校ですぐに友達ができる」などの質問項目を基に、生徒の学校への所属感を分析していますが、日本は前回調査から大きく回復しました(図

3)。不登校の生徒の増加という看過できない現実がありますが、先生方の努力によって生徒の学校への所属感は全体的には高まっているということを、知っていただきたいと思っています。生徒がウェルビーイングでいられる学校だからこそ、間違いを恐れずに自分の意見を表現し、建設的に批判し合う中で、他者と協働するために必要な読解力を生徒は身につけていくことができると考えます。

読解力は、教師から示されたテキストを読み取る時だけに必要な力ではありません。情報があふれる社会で、目的とする情報を的確に選ぶ取るために必要な力であり、大学や社会で主体的に学び続けるために不可欠な力です。日本の学校の先生方には、PISAを通して明らかに、生徒に育まれている読解力をさらに伸ばすためにも、探究学習をこれからも各校で推進していただきたいと思っています。